ヨーロッパ人が「発見」した「インドのイチジク」としてのバナナ

Bananas as “Figs in India” “Discovered” by Europeans

北西 功一*

KITANISHI Koichi

【要旨】 本稿は、ヨーロッパでバナナが身近な果物となる前に、どのようなイメージを持たれていたのかを明らかにすることを目的としている。日本ではほとんど知られていないが、中世から大航海時代のヨーロッパにおいて、バナナは「インドのイチジク」と呼ばれることがあった。これは帝政ローマ時代の博物学者として有名なプリニウスの「博物誌」に端を発するものである。さらに、その「インドのイチジク」がアダムとエバのエデンの園に生えている植物と結びつけられてもいた。ある場合は神によって食べることを禁止された果物が実る植物と、別の場合には禁断の果実を食べた結果、自身の裸体を恥ずかしく感じた二人が体を隠すために用いた腰帯の材料となる葉の植物と考えられていた。分類学の父と呼ばれるリンネがバナナに付けた学名も、エデンの園にちなんだものとなっている。これらについて、その時代の文献をもとに紹介し、当時の人たちの考えを分析したい。

【キーワード】 バナナ, イチジク, 博物誌, 聖書, 大航海時代

1. はじめに

はじめて世界一周をしたとして知られているのは、フェルナン・デ・マガリャンイス（英語名ではファーディナンド・マゼラン）の艦隊であるが、その航海の記録は無事帰還したイタリア出身のアントニオ・ピガフェッタの手記として残されている（ピガフェッタ・トランシルヴァーノ, 2011）。彼の手記によると、マゼラン海峡を通過して大西洋から太平洋に到達した後はなかなか食料を手に入れることができず、栄養失調などで何人も人が亡くなるのだが、ようやくマリアナ諸島の島に到達する。マガリャンイスたちはそこで新鮮な食料を補給しようとしたが、うまくはいかなかった。ピガフェッタは島民の食べ物として、「ココ椰子、芋（パタータ）、鳥、無花果（フィコ、イチジク）—といっても一パルモ〔約二十五センチ〕もあるのだが—、甘黍（カンナ・ドルチェ、さとうきび?）、飛び魚、その他のもの」（ピガフェッタ・トランシルヴァーノ, 2011: 67）をあげている。問題はこのイチジクである。

マガリャンイスの船はその後フィリピンに到達し、さらに南下してインドネシア方面に向か

* 山口大学国際総合科学部 kitanisi@yamaguchi-u.ac.jp

うが、そこでもイチジクは現地住民の重要な食料源として何回も記載されている。訳者は注で「ここでイチジクと呼んでいるのはバナナのことだろう。」(ピガフェッタ・トランシルヴァーノ, 2011: 341) と説明している。

この手記の中のイチジクの記述、例えば、実の大きさ、実の利用法、葉の利用法、現地での食料としての重要性、セブ島での名称が *saghin* (セブアノ語でバナナは *saging*)、モルッカ島のムスリムが使う名称が *pizam* (マレー語でバナナは *pisang*) であることからすると、これがバナナであることは明らかである。

ではなぜ、バナナがイチジクと呼ばれているのだろうか。そして、それはどのような意味が込められているのだろうか。この後で説明するが、イチジクという名称は古代ローマにまでさかのぼる。また、旧約聖書の創世記のエデンの園の話やコーランの中の楽園の話とも関わっている。バナナがエデンの園に存在した果物であるかどうかは本稿で検証することではないが、そのように考えていた人がいたことは事実である。

本稿では、古代ギリシア・ローマの時代にインドの植物として紹介されたバナナと思われる植物の話から始まり、その植物が中世から大航海時代に再びヨーロッパ人に発見されていく中で、どのように当時のヨーロッパの人に紹介されたのかを残されている文献から明らかにしていく。

2. 古代ギリシア・ローマにおけるバナナの記述

古代ギリシアの文献に研究者がバナナと推定している植物の記載がある。古代ギリシアの哲学者・植物学者テオプラストス (370-288BC) の「植物誌」のインドの植物の項目には「また、もう一つ別の木 [バナナ] があり、その葉は形が楕円形で [インド人が] かぶとに付けているダチョウの羽に似ていて、長さはほぼ二ペーキュス [約八八・八センチメートル] ほどである。」(テオプラストス, 2015: 20) という記述があり、[] は訳者が本文に付けた注釈である。訳者はこの植物をバナナとしている。葉の形と大きさについての訳者の巻末注には「バナナの葉は長さが一三メートル、幅五〇センチメートルで、テキストの数字は控えめである。形は全縁だが、中央脈に向かって垂直に裂け目が出来やすいので、ダチョウの羽に似ているともいえる。」(テオプラストス, 2015: 104) と説明があり、葉の大きさと形からバナナと推定していることがわかる。

バナナがイチジクと結びつけられることとなったそもそもの原因は、帝政ローマ時代の博物学者として有名なプリニウス (23-79 年) の博物誌の記述にある。この本は地理学、天文学、動植物学、鉱物などの知識について記述している。バナナと思われる植物はインドの植物について書かれているところ (第 12 巻十二 [24]) に記載されている。

その実がもっと大きく、もっと味のよいまひとつのイチジクがある。インドの聖者たちはそれを食べて生きている。この木の葉は鳥の羽に似ていて、長さが三キュービット (約一五十センチ)、幅が二キュービット (約一メートル) ある。果実は樹皮になり、その汁はすばらしく甘美である。一房あれば四人の人が存分たべられる。その木はバラ (バナナ) と呼ばれ、実はアリエナと呼ばれる。これはシドゥラキ領土にもっとも多い。このシドゥラキはアレクサンドロスの遠征隊が到達したいちばん遠い地点であった (プリニウス, 1986: 538-539)。

〈 〉は本文に付加された訳者の注。

訳者は、注で示しているように、この植物をバナナと解釈しており、それが定説となっている。Reynolds (1951: 9-10) は、このバナナとされる記述について、プリニウスはテオプラストスの「植物誌」を情報源としていて、それに新たな情報を付け加えて説明しているという。また、両者ともアレクサンドロス三世の東方遠征時の兵士の話がもとになっているとされる。

プリニウスの「博物誌」は、中世からルネサンスの初期にかけて事実と考えられており、かつ広く読まれていたようである。百科事典「The New Encyclopædia Britannica」のプリニウスの項目を要約する。「博物誌」は古代ギリシアの文献に基づいている部分が多いが、古代ギリシアの文献が失われるにつれて、これが一般的な教養の代わりとみなされるようになった。そして、中世には、大規模な修道院の図書館の多くがこの「博物誌」の複製本を所蔵していた (Gwinn et al. 1988: 521)。また、「博物誌」を日本語に翻訳した中野らは、この本はヨーロッパ中世において、もっとも権威のある科学書として読まれ、写され、翻訳され、抜粋され、要約され、注釈されて普及していき、ルネサンスにおいて再発見される必要のなかった数少ない書物の一つであり、写本もたくさん残されているという (中野ら, 1988: 1548)。

本稿の最初に紹介したピガフェッタのイチジクの記述は、本人が直接的に「博物誌」の該当部分を読んだのか、間接的に他の人や他の文献から知ったのかは確定できないが、「博物誌」のインドのイチジクの記述についての記載に由来していることは間違いないだろう。

3. 中世から大航海時代におけるインドのイチジク

John de Marignolli

ここからは中世から大航海時代におけるインドのイチジクの記述の例をあげる。ボヘミア出身のフランシスコ会士 John de Marignolli が 1339-1353 年に中国にまで至る旅をしており、その記録が残されている (Yule, 1913-16)。この記録でイチジクに関わることを要約する。Marignolli はインドの彼方のセイロン島にエデンと呼ばれる場所があると考えている。セイロン島のアダムの庭には現地人がイチジクと呼ぶ plantain¹ の木があるが、それは木というよりも庭の植物の特質を持っている。幹は樫の木と同じくらい太いが、とても柔らかいので力の強い人が指で簡単に穴をあけることができ、その穴から液体が流れ出す。その木の葉はとても美しく、長く、幅が広く、明るいエメラルドグリーンの色をしている。彼らはその葉をテーブルクロスとして使っているが、一度使うと捨てる。木はその頂点の部分からのみ実を結び、一本の茎に 300 もの実がなる。最初は食べるのに適さないが、しばらく家においておくと、その実は自然と熟して、素晴らしい香りが漂い、さらに味がよくなる。その実は大人のもっとも長い指の長さくらいである。自身の目で見たのであるが、その実をスライスすると切り口の両側に十字架にかけられた男の姿を見つける。アダムとエバが裸を隠すために作った腰帯もその葉であったという (Yule, 1913-16: 235-236)。

このイチジクの記述は、幾分か誇張はあるものの、明らかにバナナを指していると考えられる。太くて柔らかい幹（偽茎）と大きな葉、たくさん実がなること、その木の頂点からのみ実がなること、イチジクの葉をテーブルクロスの代わりに使い、使い捨てにすることなどは、バナナの特

徴が当てはまる。

ここで注目すべきは、このイチジクがエデンの園のイチジク、つまり、へビにそそのかされて神に食べることを禁じられた善悪の知識の木の果実をアダムとエバが食べたため、裸を恥ずかしく感じるようになり、イチジクの葉を腰帯にして巻いたという話（旧約聖書翻訳委員会, 2004: 7-9）に出てくるイチジクであるということである。聖書とのかかわりは後で触れる。

Nicolò Conti

15世紀前半にインドを探検したベネチア人 Nicolò Conti の話では、「流れの兩岸にもっとも魅力的な邸宅、プランテーション、庭園があり、そこではかなり多様な種類の果物が栽培されていて、その中でもとりわけ *musa* と呼ばれるものがあり、ハチミツより甘く、イチジクに似ている。」(Bracciolini, 1857: 10) という。ここで「流れ」とされているのはガンジス川のことである。Musa は当時のアラブ地域でバナナを指す語として使われており、後にリンネによって名づけられたバナナの属名 *Musa* の語源になっている (Reynolds, 1951: 23-26)。ここでイチジクに似ているというのは果実や植物の形態ではありえず、ハチミツの甘さに続く記述であることから、味のことであると思われる。甘い果物は他に多くあるにもかかわらず、イチジクとの類似性を強調しているのは、プリニウスの「博物誌」の記述の影響を受けているためかもしれない。

Garcia da Orta

ここから大航海時代に入る。まず、ポルトガル人 Garcia da Orta について取り上げる。彼は 1534 年からインドに医師として滞在し、そこでインドの薬物と薬草についての情報を集め、それらをまとめて 1563 年にゴアで本を出版した。その本が *Coloquios des simples e drogas he cousas medicinais da India compostos pello Doutor Garcia da Orta* であり、その本の英訳 (Da Orta, 1913) の中からバナナに関する記述を見ていく。

その本の 197 ページにイチジクについての記述があり、おいしい果物であるとともに世界各地での名称が示されている。カナラ語、ダッキーニ語、グジャラート語、ベンガル語では、クェリ (Quelli) と呼ばれ、マラヤーラム語ではパラム (Palam)、マレー語ではピカム (Picam)、アラビア語ではムサ (Musa) と呼ばれ、さらに、ギニアにもこのイチジクがあり、そこではバナナ (Bananas) と呼ばれている。訳者は注でこれを plantain であるとし、西インドの *kela* と *keh*、およびマレーの *pisang* であるという。私はインド南部でマラヤーラム語が用いられるケララ州で調査をしたが、そこではバナナを *pazham* と呼んでおり、どれも近い音になっている。

また、Da Orta (1913: 198) によると、聖地の神秘について書いているエルサレムにいたフランシスコ会修道士は、この果物が *Musa* と呼ばれていて、修道士自身が食べており、この果物がアダムとエバを罪に陥れたものであると述べているという。罪に陥れた果物ということは神に食べることを禁止された「善悪の知識の木」の果物であり、裸を隠すために葉を用いたイチジクとは異なる。エデンの園の「善悪の知識の木」の果物は一般的にはリンゴである（と思われているが、それがバナナではないかということである。

Jan Huygen van Linschoten

オランダ生まれの Jan Huygen van Linschoten は生没年が 1562/63-1611 年で 20 歳ころにインドのゴア大司教に仕えることになり、1583-1588 年にポルトガル領ゴアに滞在した。その時期に得た情報を 1596 年にアムステルダムで出版しており、日本語訳もある（岩生・中村, 1968）。その中に「第 55 章 インディエの無花果について」があり、訳者はその「無花果」にバナナと注を付けている。幹や葉、実の形態や大きさ、成長の仕方、実のなり方、収穫方法や利用法などが詳細に記載されており、明らかにバナナである。また、インディエの無花果にはたくさんの種類があり、それぞれ大きさや色、味、利用法が異なることも示しており、かなり丁寧に観察していることがわかる。

インドのイチジクの名称については、「グザラーテ人、デカン人、カナリーン人、ベンガーラ人はこれをケリと呼び、マラバル人はパランと、マラッカのマライ人はピサンという。無花果はアラビエにも見られ、そこではムサと名づける。」（Linschoten, 1968: 441）という。これは Da Orta の記載とほぼ同じで、参考に使っていると思われる。

また、「一説によれば、アダン〔アダム〕が食べたいわゆる禁断の木の实というのは無花果であったという。が、わたしはむしろ次のように考えたい。すなわち、旧約聖書のモーゼスの五書に、イスラエルの子である偵察者らが、約束の地から二人で棒で担いで来た果物の記事が見え〔旧約聖書、民数記第十三章参照〕、そして、それは葡萄のことと解されているが、これこそまさしく無花果の房ではなかったか、と。」（Linschoten, 1968: 441）とも述べられている（〔 〕は本の訳者の注）。棒で担いで来た果物の話は他で見ることはないが、アダムが食べた禁断の木の实であるという説がかなり広まっていたことがわかる。

Pieter de Marees

オランダ人の Pieter de Marees は 1602 年に西アフリカの探検記をオランダ語で出版した。その中にバナナの話が出てくる。ここでは 1912 年に出版されたオランダ語版（De Marees, 1912）と 1605 年に出版されたフランス語版（De Marees, 1605）を参照する。

De Marees (1605: 67) と De Marees (1912: 167-169) の 35 章「果実の木々について、それが持つ味、類似性、栄養、それらがどのように有益であるかについて」の最初の項目に「バナナもしくはインドのイチジクの果実」があり、その次に「Bachovens もしくは Banana de Congo」があって、この二つがバナナに関する記載である。

最初の項目では、この果実がインド中でみられ、ココナッツに次いで重要な果実であることがまず述べられ、続いて世界各地での名称が記されている。ギニアでは Banana、ブラジル人は果実は Pacona で木は Pagover、マラバル（インド南西部のアラビア海沿岸）では Patan で、Jan Huyghen（上記の Jan Huygen van Linschoten のこと）がインドのイチジクと呼んだ果物であるという。その次に、植物全体、葉、実の大きさや形態、成長の仕方、収穫の仕方や収穫から 3、4 日後に黄色く熟すること、食感や味、たくさん食べすぎると胃やのどの痛みを引き起こすことなどが書かれている。

エデンの園に関わることとしては、一部の人はこれが楽園にあった木であり、神がアダムと

エバに食べることを禁じたものであると考えていることと、果物を切ると中央に十字架が現れると述べている。

一方で「Bachovens もしくは Banana de Congo」の項目では次のような説明がある。Bachoven はバナナと比べて果実が少し短くて小さいことを除けば形態的にほとんど同じで、実の中がバナナよりも少し白くて甘く、バナナより健康的であると考えられているが、そこまで多く育つものではない。また、コンゴ王国からもたらされたので Banana de Congo とも呼ばれているという。

この記録の信憑性について書いている Fage (1988: 328) によると、当時のオランダとポルトガルの関係から De Marees が西アフリカで活動し情報を得ることが難しかったため、彼の本に書かれているよりも回数が少なく期間も短い観察しか行われておらず、彼の書いたものの多くは個人的な観察をもとにしているのではなく当時入手可能だった出版物をもとにしているのではないかと述べている。実際、Marees の記述を項目ごとに見ると、「バナナもしくはインドのイチジクの果実」は西アフリカの話というよりもバナナ全般の話であり、それは他の出版物を参考にしておりと考えられる。一方で、「Bachovens もしくは Banana de Congo」のところは Bachoven という独特な名称や大きさや味、由来の具体的な記述から彼が実際に観察したり、現地で話を聞いたものであると思われる。

当時の探検記には、以前の出版物の記述で使えるところは使いつつ、それに自身の観察も加えて混ぜつつも、それを区別せずに記載しているものがある。一方で、自身の観察を中心に書いたものもあり、例えば、マガリャンイスの艦隊の世界一周を記録したピガフェッタの記録は、少なくとも「インドの無花果」という名称を除けば、バナナについての具体的な記述の部分は彼が直接観察したものを忠実に書いていると思われる。

4. リンネが名づけたバナナの学名

リンネは、生物の種の学名を属名と種名を列記する形で記載する二名法を作り出したことで有名であり、バナナに初めて二名法で学名を与えた人でもある。その学名は二つあり、*Musa paradisiaca* と *Musa sapientum* である。現在、バナナの研究が進んだ結果、この二つの学名が用いられることはなくなった²。しかし、この二つの種名は、リンネが「植物誌」や「博物誌」さらに聖書とバナナに関連について何らかの知識があったことを示しているが、それを直接的に示す文献が見つからないので、他の研究者の言及から見ていく。

属名である *Musa* についてはアラブ地域で使われていた単語を語源としており、さらにその語源をインドに辿る説も有力である（例えば、Reynolds, 1951: 23-26）。ここで注目したいのは *paradisiaca* と *sapientum* である。*Paradisiaca* は「楽園（パラダイス）」という意味であり、これはエデンの園を指している。*Sapientum* は「賢者」もしくは「知識・知恵」という意味である。

研究者によってどのバナナにこの学名を当てはめるのかが異なる。Reynolds (1951: 4-5) は、*Musa paradisiaca* は Fruit of Paradise の意味で、料理用バナナを指すとし、この名称はエデンの園に生えている木に由来していて、その果実は善と悪の起源になっているという。一方で *Musa sapientum* は賢者の果実を意味し、生食用バナナを指すとされていて、テオプラストスが「植物誌」でインドの賢者の食べ物として言及していると主張している。ただし、植物誌を見ると、バナナ

とされる果物の直前にインドの賢者が食料としている果物が紹介されている。記者は本文の注でその果実をマンゴーと推定している（テオプラストス, 2015: 20）。巻末注にはパンノキとする説もあることを紹介しつつ、味の観点からマンゴーの方が有力であるという（テオプラストス, 2015: 103）。

Popeone (1914: 276) は、プリニウスの記述を参考に、インドの賢者がその果物を食べて生きているということから、リンネがそのように名づけたと説明している。ただし、本稿で前述したように「博物誌」の記述の日本語訳は「聖者」であり「賢者」ではない。

語源や語法の辞書である Yule & Burnell (1886) には banana と plantain の項目があり、plantain の方の記述が充実しているため、そちらを参照する。ここでは、banana が *Musa paradisiaca* で plantain が *Musa sapientum* であるとしている。ただし、これら二つに分けるためにどこで線を引くかは難しく、変異は漸進的であると述べている。さらに、*Musa sapientum* という学名はプリニウスの一節の誤解に由来するとし、プリニウスのバナナを指すとされている記述はパラミツ（ジャック・フルーツ）の説明であるとしている（Yule & Burnell 1886: 540）。

最近出版された本でバナナの歴史とバナナ産業の課題について取り上げたコッペル (2012: 24) でも、この学名について触れており、「甘く黄色いバナナには、善悪を知る知恵の木にちなんで「知識」を意味するラテン語から“*Musa sapientum*”という学名を与えた。また青いバナナ（料理用として利用されている“プランテー”のことは“*Musa paradisiaca*”すなわち「楽園のバナナ」と名付けた。」となっている。また、エデンの神話で裸であることに気づいたアダムとエバが「イチジクの葉」で体を覆ったとされているが、これもバナナであるとしている（コッペル 2012: 25）。

このように、学名と生食用・料理用の対応が Reynolds (1951) とコッペル (2012) で同じであるが、Yule & Burnell (1886) は逆で、研究者の間で意見が分かれている。その一因として、テオプラストスやプリニウスの記述のどの部分を採用するかとその解釈が異なることがあげられる。さらに、学名の対応が同じである Reynolds (1951) とコッペル (2012) でも古代ギリシア・ローマの記述のどこを取り上げ、どのように解釈するかは異なっている。

旧約聖書に加えて、コーランにもバナナがパラダイスの木として言及されているという。コッペル (2012: 26) は、「コーランでは、エデンの楽園の木は“talh”と呼ばれ、これは通常、「楽園の木」と訳されるアラビア語である（あるいはもっと直接的に「バナナの木」と訳される場合がある）。」と説明している。実際にコーランを見ると、第五十六章 恐ろしい出来事の中に、「次に、右組の連中、これはどうかと申すに、棘なしの灌木と下から上までぎっしり実のなったタルフの木の中に（住んで）、長々と伸びた木陰に、思いのままに水を浴び、おまけに豊富な果物が絶えることなく、取り放題、食い放題」（井筒 訳, 1958: 177）という文章があり、このタルフがバナナとされている。コーランのこの部分は、天地の終末の後に人間がどこに行くのかという話の一部である。天地の終末の後、人間は「先頭に立つ連中」、「右組の連中」、「左組の連中」の三組に分けられ、先頭に立つ連中が一番立派な信者で、得も言われぬ楽園に行くことになる。右組の連中は普通のムスリムでそれなりの楽園に行くことになる。左組は現世で贅沢三昧し、恐ろしい罪を犯した人たちで地獄に行くことになる。Unasylyva という FAO が発行する林業についての学術雑誌に登載された Musselman (2003: 45) には、talh はバナナか、広く分布しているアカシア属の

木の一種か研究者はどちらか決めかねているという説明があり、バナナの可能性があるという説明があり、バナナの可能性があるという説明があり、研究者が考えていることがわかる。

キリスト教とイスラームと、バナナの関わりについて、Yule & Burnell (1886) のプランテンの項目の *Musa paradisiaca* のパラダイスに対する説明の中で言及されている。「特有の名称 *paradisiaca* は東洋のキリスト教徒の古い信仰に由来しており（ムスリムによってつくられたものではないかもしれないが、彼らによっても継承されていた）、その信仰はその木の葉からアダムとエバのエプロンを作ったというものである。」とある（Yule & Burnell 1886: 540-541）。引用文献がないため、この記述が何に基づいているのかわからないのが残念である。ただし、バナナがエデンの園の植物であるという話はヨーロッパにもともとあったものではなく（バナナがヨーロッパになかったので当然ではあるが）、東洋のキリスト教徒やムスリムの信仰であり、それを本稿で取り上げた John de Marignolli などの東洋への旅行者や探検家が発見したという筋書きになっていることがわかる。

5. まとめ

インドのイチジクとしてのバナナはプリニウスの博物誌の解釈から始まり、東洋のキリスト教やムスリムの信仰と結びついてエデンの園の植物となった。ただし、これはヨーロッパ人にとってのバナナのイメージの歴史であり、実際に熱帯地域でバナナを栽培していた人たちが持っていたイメージと同じではないと思われる。

ヨーロッパ人がなぜこのような話を中世から大航海時代にかけて再生産し続けたのだろうか。つまり、その時代にバナナの生産地に赴いた探検家や商人、宣教師などがそのようにバナナを紹介し続けた理由が何かということである。探検家たちが熱帯で見た植物の中で、バナナはその植物としての大きさや形、さらに果房の大きさや果実のなり方、実の形や数の多さ、果実の味や食感などの点で、他の果物とはかけ離れている。そのユニークさが、熱帯に存在する珍奇でエキゾチックな果物という印象をまずは与えたに違いない。さらに、テオプラストスやプリニウスの著作とバナナが関わっているということが、ルネサンス期における古代ギリシア・ローマに対する関心の高さのために、バナナへの注目をさらに大きなものにしたのかもしれない。エデンの園の果物という神秘性もヨーロッパ人にとってエキゾチックさを増す要素として魅力的に見えたのだろう。

現代の日本において、バナナは値段が手ごろで味もよく、どの季節でもスーパーに並んでいて、最も食べられている果物の一つである。北米におけるバナナのイメージを分析した Soluri (2003) によると、20世紀の北米でのバナナの文化的な意味は多重的であるが、それにはユーモアや滑稽さ、そしてセクシャリティと結びつけられることがしばしばあること、さらにはコメディアンやミュージシャンはペニスから反民主的な政治体制（例えば「バナナ共和国」）までを思い起こさせるためにバナナを用いてきたと述べている。日本ではバナナが反民主的な政治体制のイメージを持つことは少ないが、滑稽さやセクシャリティと結びつけられることはありそうである。大学の授業で私がバナナを研究していると話すと、なぜか学生の間からくすくす笑いが起きることがある。バナナを研究対象としてまじめに取り組むことに違和感を感じているのかもしれない。

このように、現在の日本や北米の人たちが持つバナナに対するイメージと、中世や大航海時代のエキゾチックでエデンの園とかかわるかもしれないというある種の神秘性を持つバナナのイメージはまったく異なっていると言える。

Soluri (2003) によると、19 世紀から 20 世紀の初めまでにバナナは珍しいものから単なる商品に変化した。より身近な果物となったバナナは、南国のエキゾチックさはある程度保っているかもしれないが、神秘性はほとんど失われてしまったのだろう。

現在の日本でバナナの流通に関わる企業は自社のウェブサイトで、ダイエットに向いている、食物繊維が多くて便秘の予防・解消に役立つ、高血圧対策による、スポーツでの栄養補給に向いているなど健康面をアピールしている（例えば、ドール・ウェブサイト、スミフル・ウェブサイト）。一方で、社会問題や環境問題に関心のある人は、バナナ・プランテーションの労働者の問題や農薬の問題を思い浮かべるだろう（北西, 2007）。

このように、バナナに対するイメージを見ていくことで、その社会が持っている関心がどこにあるのかを見定めることができるのかもしれない。

注

- 1: Maringoli の時代には plantain は料理用バナナとして用いられてはいなかったので訳者 Yuke が付け加えたものであろう。
- 2: 現在の学名については小松 (2022: 9-12) を参照。

【参考文献】

- Bracciolini, P. 1857. The travels of Nicolò Conti, in the East, in the early part of the fifteenth century (translated by J. W. Jones). in (R. H. Major ed.) *India in the Fifteenth Century. Being a Collection of Narratives of Voyages to India. In the Century Preceding the Portuguese Discovery of the Cape of Good Hope; from Latin, Persian, Russian, and Italian Sources, Now First Translated into English.* Burt Franklin, New York.
- Da Orta, G. 1913. *Colloquies on the Simples & Drugs of India* (translated by C. Markham). Henry Sotheran and Co., London.
- De Marees, P. 1605. *Description et récit historial du riche royaume d'or de Guinea.* (éd. 1605). Hachette Livre: Bnf.
- De Marees, P. 1912. *Beschryvinghe ende Historische Verhael van het Gout Koninckrijck van Gunea.* S. P. L'Honoré Naber, S-Gravenhage.
- Fage, D. 1988. Review: seventeenth century Gold Coast. *Journal of African History.* 29 (2): 326-328.
- Gwinn, R. P., P. B. Norton and P. W. Goetz (eds.) 1988. *The New Encyclopædia Britannica*, Vol. 9. Encyclopædia Britannica, Chicago.
- 井筒俊彦 (訳) 1958. 『コーラン下』岩波書店。
- 岩生成一・中村孝志 1968. 「解説」『東方案内記』岩波書店。

- 北西功一 2007. 「バナナ産業と多国籍企業 (2) :1990 年から 2006 年におけるチキータの社会・環境問題への対応」『山口大学教育学部研究論叢』57 (1) :67-75。
- コッペル, D. 2012. 『バナナの世界史 歴史を変えた果物の数奇な運命』(黒川由美 訳) 太田出版 (Koepel, D. 2008. *Banana: The Fate of the Fruit that Changed the World*. Hudson Street Press, New York.)。
- 小松かおり 2022. 『バナナの足、世界を駆ける一農と食の人類学』京都大学学術出版会。
- 旧約聖書翻訳委員会 訳 2004. 『旧約聖書 I』岩波書店。
- Linschoten, J. H. van 1968. 『東宝案内記』(岩生成一・渋沢元則・中村孝志 訳) 岩波書店 (Linschoten, J. H. van 1596. *Itinerario, voyage ofte schipvaert naer Oost ofte Portugaels Indien.*)。
- Musselman, L. J. 2003. Tree in the Koran and the Bible. *Unasyuva* 213 (54): 45-52.
- 中野定雄・中野里美・中野美代 1986. 「解説」『プリニウスの博物誌 第三巻』雄山閣出版。
- ピガフェッタ, A.・M. トランシルヴァーノ 2011. 『マゼラン 最初の世界一周航海』(長南実 訳) 岩波書店。
- プリニウス 1986. 『プリニウスの博物誌 第二巻』(中野定雄・中野里美・中野美代 訳) 雄山閣出版。
- Popenoe, P. 1914. The origin of banana. *The Journal of Heredity*. 6: 273-280.
- Reynolds, P. K. 1951. Earliest evidence of banana culture. *Supplement of the Journal of the American Oriental Society*. 12: 1-35.
- Soluri, J. 2003. Banana cultures: Linking the production and consumption of export bananas, 1800-1980. in (S. Striffler and M. Moberg eds.) *Banana Wars: Power, Production, and History in the Americas*. Duke University Press, Durham, pp. 48-79.
- テオプラストス, 2015. 『植物誌 2』(小川洋子 訳) 京都大学出版会。
- Yule, H. 1913-16. *Cathay and the way thither: being a collection of medieval notices of China* vol. II. Hakluyt Society, London. (ウェブサイト THE TRAVELS OF JOHN DE MARIIGNOLLI 1339-1353. <https://depts.washington.edu/silkroad/texts/marignolli.html> を参照。冒頭に Yule (1913-16) をデジタル化したものであるという記載がある。閲覧日 2024 年 6 月 7 日。)
- Yule, H. R. E. and C. Burnell 1886. *Hobson-Jobson: Being a Glossary of Anglo-Indian Colloquial Words and Phrases, and of Kindred Terms; Etymological, Historical, Geographical, and Discursive*. John Murray, London.

【参考ウェブサイト】

- Dole ウェブサイト, <https://dolesunshine.com/jp/ja/> (2024 年 7 月 9 日閲覧)
- スミフルウェブサイト, <https://www.sumifru.co.jp/> (2024 年 7 月 9 日閲覧)